

■各曲解説

通し番号 / 変奏番号 解説 表題

- No.1 Var.0
小シンフォニア
(Sinfonia)
- テーマ(キラキラ星の旋律、以後“テーマ”と記す)をそのまま通奏低音として配置した小さなシンフォニア。通常の変奏では最初にテーマを提示し、それ以降に変奏が続くが、これは例外的にテーマ提示以前に配置した変奏なので、変奏番号を1でなく0としている。
- No.2 Theme
星を見上げて
(テーマの提示)
- テーマの提示。主旋律をソプラノに配置し、コラール風の和声を付与。中間部後半の転調は、以後の多くの変奏にも引き継がれる。問いかけの歌詞による1節目はソロで、子供あるいは子供に近い声色の女声向き。応える歌詞による2節目は合唱での演奏がふさわしい。子供たちと一緒に夜空の星を見上げて、イエスさまのお話が始まる。
- No.3 Var.1
大いなる光
- イザヤ書9章1節をテキストに、救い主誕生の預言、渴望を歌う。
短調化したテーマに装飾を加えて通奏低音に配置。テノールに始まり、各パートが加わっていく。曲の中間点以降はテーマの旋律線が逆行する。
上声部には音楽、美術、数学それぞれの偉人の名前を音名でそれぞれ2回織り込んでいる。すなわち、S.声部に“BACH”(J.S.Bach)と“ESCHER”(Maurits Cornelis Escher)、A.声部に“GOEDEL”(Kurt Gödel)。“BACH”の4文字で開始したこの変奏は、“BACH”の4文字でピカルディ終止するが、その末尾2文字は“CHRIST”の先頭2文字に重なり、キリストの足跡を歌い綴る一連の変奏の開始を宣言する。
- No.4 Var.2
待降のキャロル
- 短調化したテーマを3拍子でバス・パートに配置。
その上に救い主の誕生を願い待ち望む素朴なキャロルを乗せて歌う。
前曲の旧約と、新約を繋ぐ位置にあるこの曲を経て、次曲から新約の光が差し込む。
- No.5 Var.3
みつかい告げる
(受胎告知)
- ルカ 1:26-38 による“受胎告知”のシーン。
パッヘルベル・コラール様式風に、下3声が次々テーマを模倣して歌う中、ソプラノが音価を2倍に拡大したテーマを歌いだす。その時、拡大と非拡大の旋律を不協和にならない範囲でオーバーラップさせている。
また末尾では180°回転したテーマを伸縮させてバスに重ねている。
- No.6 Var.4
マリアの讃歌
(Magnificat)
- ルカ 1:47-55 に基づくマニフィカート。
途中から調性が幅広く移り変わり(G-B-b-f-c-g-G)、拍子も変化(3/4⇒3/8⇒3/4)する。
歌詞では日本語、ラテン語の共存を試みている。原則としてラテン語で歌う声部にはテーマが割り当てられる。
テーマは当初180°回転した形でバスに置かれるが、その後他のパートにも移動する。
やがてバスを中心に、前後反転したテーマや、上下反転したテーマも現れる。3/8拍子に変わると、テーマに基づくフゲッタがバスから始まるが、その対旋律(アルトから開始)は180°回転したテーマを内包する。
3/4拍子に戻った後、終了直前には無伴奏でのラテン語朗誦が入る。
- No.7 Var.5
ベツレヘムへの旅路
- 住民登録のためナザレからベツレヘムに向かうヨセフとマリアの旅路をイメージしている。
テーマは基本形のままテノールに配置。テーマの旋律線自体は長調系のままでそこに短調主体の和声をあてがう点が1つの試み。アルトの掛留音解決を伴ってピカルディ終止する際のソプラノの“CH”の音列はその後の“CHRIST”誕生を予告する。

- No.8 Var.6
ベツレヘムの馬小屋で
(イエスの誕生)
- イエスの誕生のシーン。安らかに眠るみどりごの姿を歌う。テーマは 180° 回転のうえ変形して主に通奏低音に配置。女声 2 声部が主体だが、中間部では男声が主題中間部の断片を歌って支える。前奏で長 3 度づつ下に 3 回転調(e⇒c⇒as⇒e)、1 周して元に戻る。続く歌唱部では転調する度に視野の角度が町⇒小屋⇒小屋内部と切り替わるイメージ。中間部ではキーワードとなる”星”を歌詞に含みつつカノン風に進行。前曲に引き続き、アルトの掛留音解決を伴ってピカルディ終止する際のソプラノの”CH”の音列が、今度は”CHRIST”誕生の表明となる。
- No.9 Var.7
羊飼いのカノン
- テーマの前後反転形を通奏低音に配置したカノン。上 2 声部が 4 度カノンを展開。上から 3 番目のパートが部分的ハーモニーを補完する。器楽のみでの演奏。
- No.10 Var.8
羊飼いやへの良き知らせ
- 前の変奏に引き続き、テーマの前後反転形を通奏低音に配置。上声部における順次進行での下降音形は、天からの良き知らせ、またイエスの降誕を表象する。
- No.11 Var.9
天使の讃美
(Gloria)
- 前の変奏を受けた”Gloria”。この変奏では全パートがラテン語歌詞となる。”Gloria”ではテーマを装飾した旋律をフゲッタの主題とするが、対となるバス声部の一部ではテーマの 180° 回転形を用いている。主題の模倣(A⇒S⇒B⇒T⇒S)が一巡すると、後半の”Et in terra pax”に移る。その冒頭では男声 2 パートがテーマの上下反転形(テノール)と前後反転形(バス)を対にして歌う。以後の 2 声の掛け合いでは他のパートがテーマの中間部を重ねる。バスの活発な動きの上に上声部が半音階的に上昇した後、ソプラノとアルトが装飾されたテーマを掛け合いで歌い、最後にアルトがテーマを原型で歌う。
- No.12 Var.10
馬屋に急げ!
- リズムを変形したテーマをソプラノに配置し、各パートがリズム的な掛け合いを行う。合いの手を受け持つパートに特に歌詞は割り当てず、歌い方は演奏者に委ねている。
- No.13 Var.11
みどり子イエスの子守歌
- 6/8 拍子のシチリアーのリズムによる子守歌。修飾したテーマをソプラノに配置している。
- No.14 Var.12
洗礼者ヨハネ
- テーマと和声をドリア旋法風に変形し、荒野をイメージしている。冒頭はテノール・ソロ、それを合唱が引き継ぐ。
- No.15 Var.13
鳩のように
(イエスの洗礼)
- リズムを変形したテーマをソプラノに配置した女声 2 声による重唱または合唱。歌唱部と独立した器楽オブリガート声部をもつ。高音域でのオブリガートの飛翔が鳩～神の霊を表象する。
- No.16 Var.14
イエスの弟子
- テーマと和声をドリア旋法風に変形してソプラノに配置した古風で素朴な民謡のイメージ。いったん器楽で演奏後、歌となる。簡略された短い歌詞だが、情景を元に別途歌詞を創作して有節の曲としてもよい。
- No.17 Var.15
カナの婚礼
- イエスの最初のしるし
- 婚礼の場の華やかさを 9 拍子に託す。水を注いでいる時の曇ったハーモニーが、水がぶどう酒に変わったときに晴れ上がる。テーマはバスとソプラノに対となって現れ、バスでは基本形の変形、ソプラノでは 180 回転形の変形、これらが同時進行する。
- No.18 Var.16
イエス山に登る
- バスに 180° 回転したテーマを配置。下降するテーマによる通奏低音の上に、ソプラノ声部は順次進行で上昇し「山に登る」を表象する。

- No.19 Var.17
山上のイエスの言葉
アルトに主題の原型を配置しているが、ミクソリディア旋法風の扱いとしている。
すなわち通常は主音で始まり主音で終わる主題が、ここでは主音でなく属音(階名でいう“ド”でなく“ソ”として)で終始する。
拍子のない朗誦調。テンポ、音符の長さは言葉に応じて柔軟に変化させてよい。
- No.20 Var.18
疲れた者、重荷を負う者
短調化し3拍子となったテーマはテノール声部～器楽上声部を移ろう。
前奏で器楽内声部にあったテーマはテノールでの歌が始まると器楽上声部に移るが、後半ではテノール声部がテーマの変形を歌う。バスの動きが重荷を受け止める。
- No.21 Var.19
イエス湖上を歩く
テノール(中間部はバス)は、2拍内にテーマを圧縮した音型を繰り返す。それと同時に、繰り返しの各起点の音を繋ぐと全体ではテーマを180°回転した形が現れる。マクロとミクロでのテーマの組み合わせ(あるいは有限個の階層に限ったフラクタル)の試み。後半では関係が交代し、前後反転したテーマの圧縮と上下反転したテーマが組み合わさる。この圧縮主題は湖の波の描写でもある。また中間部でのアルトの音形には沈みそうで慌てる様が反映される。
- No.22 Var.20
ラザロの死と甦り
通奏低音に前後反転したテーマを配置し、パッサカーリア形式の曲風に始まるが、実際には変奏して繰り返すことはない。アルト(マルタ)、ソプラノ(マリア)の若干の模倣/掛け合いがある。短調での嘆きのシーンの後、ラザロの甦りがピカルディー終止を伴って歌われる。
- No.23 Var.21
イエスにすぎる2人のカノン
イエスにすぎる2人の人の叫びを2声部のカノンで表象する。
変形したテーマを歌うソプラノをアルトが5度下で4拍後から模倣していく。
男声2パートが下で支える。前曲に引き続き、ピカルディー終止で癒しと安堵を伝える。
- No.24 Var.22
エルサレムに向かうプレリュード
次の曲に対する前奏曲の位置付け。器楽のみでの演奏。
バスがペダル鍵盤的な音型を繰り返しながらマクロな観点で主題を綴る。
一方、最上声部は180°回転した主題を内包する。
短調で始まり、曇りがちなハーモニーを経て長調に転じ、次の曲を導く。
- No.25 Var.23
ダビデの子、ホサナ
イエスのエルサレム入城の場면을歌う。
勇壮な付点のリズムに変形したテーマを前奏に続いてバスのソロが歌い、合唱が引き継ぐ。
- No.26 Var.24
ユダの裏切り
バスはテーマそのものを歌う一方、ソプラノは上下反転したテーマを上重ねる。
バスに対するソプラノの尖ったぶつかりがユダの反逆を表象し、内声のうねる小刻みな音型は蛇を表象する。
- No.27 Var.25
ゲッセマネの祈り
通奏低音はテーマそのものを3拍子で奏するが、その上に乗る和声は頻繁に揺れ動き、事態の深刻さとイエスの心情を描写する。イエスの語る言葉はバスのソロが歌う。
- No.28 Var.26
イエス捕らわれる
テーマが原形のままソプラノで歌われる一方、バスは16分音符で動き回り、イエスが捕えられる物々しい騒乱状況を伝える。
- No.29 Var.27
大祭司の前で
外声が相互に反対方向に半音階で動きながら、強引にハーモニーを切り裂き、権力者による有無を言わせぬ威圧を表す。

- No.30 Var.28
ペトロに迫る人々の
カノン
変形したテーマによるカノン。ソプラノをアルトが4度下で2拍後から模倣していく。先の「イエスにすぎる2人のカノン」ではソプラノをアルトが4拍後から5度下で模倣していたが、ここでは模倣開始を2拍分手前にずらすことで4度下にフィットさせている。カノンの2声部にテノールを加えた3声から人々の言葉を浴びせられたペトロによる否認の言葉は、ソプラノ、アルト、テノールで各1回発せられ、3度の否認となる。
- No.31 Var.29
ペトロの改悛
短調化したテーマをテノールが歌い、それを支えるバスとの二重唱との上に器楽によるオブリガートが舞う。
- No.32 Var.30
シンメトリーなアリア
(言葉と音楽の回文)
前の変奏で歌われたペトロの悔いへの慰めの音調をもつ。形としては言葉と音楽による回文。楽譜を反対側から演奏しても歌詞・音符共同じになる。中間まで行って引き返すことにも等しく、ペトロの生き方の方向転換の意味も持つ。前半ではソプラノによるテーマ(一部変形)とバスによる180°回転したテーマが対になり、後半ではソプラノによる前後反転したテーマ、バスによる上下反転したテーマが対になって歌われる。
- No.33 Var.31
法廷
不条理な法廷の場面。テーマを通奏低音に配置し、器楽が連続する四分音符で奏する一方、歌唱部ではバスが言葉に合わせてリズムを崩しながらテーマを歌う。冷徹な裁きの場に合わせて、第7音をバスに置いた属七の不安定な和音が頻出。減七の和音に突入後、属七に転じて、次の変奏を導く。
- No.34 Var.32
猛る群衆のカノン
単純な3声の同度(8度)カノンの形により群衆の付和雷同を象徴する。通奏低音声部は器楽のみで、合唱はテノール+バス⇒アルト⇒ソプラノの順で模倣。アルトは男声の8度上、ソプラノはアルトと同度だが、可能ならソプラノと重ねる器楽はそのオクターヴ上を奏することが望ましい。
- No.35 Var.33
兵士らイエスをなぶり
様々な調性で長調⇒短調の変遷を繰り返しつつ、テーマが色々な声部に断片的に錯綜、執拗な16分音符のメリスマ音型と共にイエスを嘲りからかう兵士たちの声と悪態の様子を次々と繰り返して行く。極めて不自然な転調が続くが、この転調のキーを繋ぐとキラキラ星の旋律線(G-D-E-D-C-H-A-G)となる。
- No.36 Var.34
十字架へのプレリュード
次のフーガと対をなす前奏曲。通奏低音による180°回転した主題の上での、同型音型の繰り返しに始まり、変化しつつ疾走。通奏低音が半音階進行に変わっていく中、雪崩れ込んで休止する。この時のd-mollのピカルディ終止となるDの根音が、次のフーガの開始の音となる。
- No.37 Var.35
十字架のフーガ
イエスの十字架の道行きを歌う4声フーガ。間奏部を挟んで3回の展開部を持つ。第1展開部:テーマを上下反転のうえ修飾した形のフーガ主題をT⇒B⇒S⇒A⇒Tの順で展開する。第1間奏部:テーマ中間部を反転した音形を下から順に重ねて行き、ゴルゴタの丘に上って行くことを表象。第2展開部:第1展開部のテーマを上下反転したフーガ主題(つまり元のテーマから見れば正立)をS⇒A⇒T⇒B⇒Sの順で展開。ソプラノにフーガ主題が戻って来た時、バスには180°回転したテーマが対となって現れる。第2間奏部:テーマ中間部の音形を各声部が模倣して繰り返す中、多様に転調を繰り返しながら次の第3展開部を導く。第3展開部・第1展開部のフーガ主題が再現するが、通奏低音には前後反転したテーマが現れる。ストレッタとなり、バスによる象徴的な半音階下降の上でソプラノが最後のフーガ主題を歌った後、通奏低音に再び前後反転したテーマが現れ、テノールの突き刺すような掛留解決で締めくくる。なお全体にわたり16分音符での十字架型のモチーフを含む。

- No.38 Var.36
イエスの死
通奏低音には上下反転したテーマを配置。前奏の後、アルト・ソロで開始、合唱が引継ぎ、イエスの死を告げてフリギア終始する。
これまでの歌詞が出来事の描写中心であったのに比べ、この曲ではそれを「私」の心で見、「私たち」にとっての意味として語る。
- No.39 Var.37
神の子羊
(Agnus Dei)
前奏の後、短調化されたテーマをアルト声部に配置した上でソプラノ・ソロが装飾的な声部を歌う。中間部ではソプラノ合唱声部がテーマを歌うが、それをバスの象徴的な半音階下降が支える。最初のテーマが戻った時、曲は希望に向かって進み始める。
- No.40 Var.38
イエスの墓で
尋常でない出来事の、尋常でない光景と心情にあわせて、尋常でない素数での変拍子(2|3|5|7|11)が繰り返される。中間部では器楽パートが動き回るが、主題は常時テノール声部にあり、拍子に合わせて引き延ばされ、潜んでいる。
- No.41 Var.39
復活のプレリュード
次の合唱フーガと対をなし、その前奏となる。
上下反転したテーマを通奏低音として、喜びのリズムが炸裂し、続くフーガを導く。
この曲の開始の動機は、続くフーガの終結部分に再び現れる。アタッカで次へ。
- No.42 Var.40
復活のフーガ
復活の喜びを歌う4声フーガ。間奏部を挟んだ3回の展開部を経て終結部へ向かう。
・第1展開部:変形したテーマによるフーガ主題が $T \Rightarrow A \Rightarrow S \Rightarrow B \Rightarrow T$ の順で展開。
・第1間奏部:テーマ中間部の動機によるストレッタ風の掛け合い。その反転形を重ねる器楽部分を経て次の展開部へ。
・第2展開部:フーガ主題の上下反転形を $B \Rightarrow T \Rightarrow A \Rightarrow S \Rightarrow B$ の順で展開。途中、通奏低音に前後反転したテーマが対旋律として現れる。最後はソプラノ⇒バスでのストレッタとなり、次の間奏部に流れ込む。
・第2間奏部:エンハーモニックを含む飛躍する転調を繰り返しながらテーマ中間部の動機を順に引き継いでいく。遠隔地への転調の旅の末、主調に戻る瞬間に次の展開部に移る。
・第3展開部:フーガ主題とその上下反転形が混在した展開で始まる。ストレッタが3段階(2小節遅れ⇒1小節遅れ⇒半小節遅れ)にわたって現れる。いったん器楽のみによる経過句を経て、合唱が再登場する時にはフーガ主題がその180°回転したテーマを対旋律として進行する。最後はその180°回転主題を通奏低音として、内声部での Amen の掛け合いとなり、前の変奏の冒頭の動機を再現して曲を締めくくる。
- No.43 Theme
再び星を見上げて
(テーマの再現)
最後にテーマが再現する。Theme 提示時の2回目と同様なコラール風和声、ただし最後にテノールが掛留後に解決。それによる音の動きに CH(Christ)が現れる。
イエス・キリストの足跡を語り終えて、再び夜空の星を共に見上げる。